

〔研究ノート〕

「主体の脱中心化」に関する

A・ギデンズの理解をめぐって

佐藤 康 行

一

本稿の目的は、社会学への構造主義のとり入れ方に関するアントニー・ギデンズの考え方、とりわけ「主体の脱中心化 (the de-centring of the subject)」「概念の理解の仕方を検討することにある。従来、日本の社会学は構造主義を十分に取り上げてきたとはいいがたい。しかし近年「文化記号論」⁽¹⁾が唱えられるにおよんで、社会学は構造主義の意義を改めて問う必要が生じてきている。そこで、本稿では構造主義を批判的に踏まえようとしたギデンズの「主体の脱中心化」⁽²⁾概念の理解の仕方を検討することにした。

こうした試みの背景には、構造を發生的、構成的なものとしてのみ捉えている構造主義のひとつの研究方向⁽³⁾に対するアンチ・テーゼとしての含意がある。本稿は構造のある層を先験的なものとして捉えるレヴェルに遡って、社会学と構造主義との間に根本的な橋を架けようとするものである。

まず構造主義における「主体の脱中心化」概念を、ギデنزが理解する場合の基本的な姿勢を概観することから始めたい。ギデنز は自らの社会学理論を「構造化理論 (the theory of structuration)」と称している。この「構造化理論」にあって中心的な位置を占めているのが「構造の二元性 (the duality of structure)」という概念である。彼はこの「構造の二元性」という概念によって「構造と主体者の行為 (agency) とが相互に依存しあうこと」を表わしている。

「私が構造の二元性ということの意味しているのは、社会的諸体系の構造的諸属性が、それらの諸体系を構成する実践を媒介するものであると同時に、その結果でもあるということである」⁽⁴⁾

こうした「構造の二元性」概念の内容について次に具体的に見ていきたい。そこでまず、彼の「構造」概念を明確にすることにしよう。

ギデنز は、「構造」が「社会体系」の「構造的諸属性」としてのみ存在すると考えている。そしてこうした「構造的諸属性」を、なによりも「規則」と「財 (resources)」であると考えている。彼はこうした「規則」と「財」との「構造的諸属性」のセットが「構造」であるという。⁽⁵⁾

彼によれば、「行為者は規則を知っていることと対応した意味で、財を所有している」のである。⁽⁶⁾たとえば、

「権威は、行為者が他者の行為に影響を及ぼすために潜勢的に用いることのできる構造化された財である」⁽⁷⁾

他方、「社会体系」とは、「典型的には再^レ起^レする社会的実践として最もよく分析されるところの、諸個人もしくは諸集団の間で相互に依存しあう規則化された関係」を含意したものである。⁽⁸⁾

ところで、ギデنزによると、社会的相互作用の体系が構造化される全過程は、三つの要素を含んでいる。その三つの

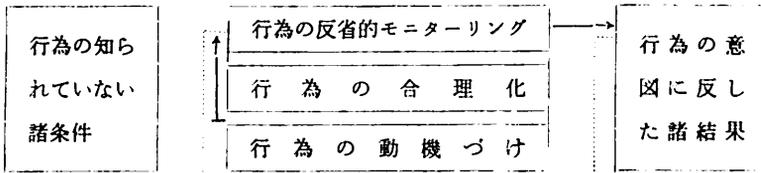
要素とは、意味のコミュニケーション、権力の行使、行為の評価的判断である（1図参照⁹）。彼によると、「意味作用としての構造は意味論的規則を、支配としての構造は不均等に配分された財を、正当化としての構造は道德的もしくは評価的規則を含んでいる¹⁰」。また、「規則」と「財」がコミュニティや集合体の属性と考えられているのに対して、「モダリティ(modality)」として措定されている「解釈図式」、¹¹「弁舌の才」、¹²「規範」は、「行為者が相互作用を行なうさい依拠することができる知識と能力(capabilities)」を指示するために考えられている。行為者はこうした「構造化のモダリティ」を用いることによって、相互作用の再生産を作り出している。と同時に、こうした「構造化のモダリティ」は、「相互作用の体系的な構成要素を再生産するメディアである」。このようにみても、ギデンズが「構造の二元性」という概念によって意味しようとしたことは、行為者が「モダリティ」を通して相互作用の体系的な「構造的諸属性」を再生産していると同時に、行為者の相互作用の再生産を媒介するものが行為者が「モダリティ」として依拠する「構造的諸属性」なのだということである。

ところで、ギデンズは今日の社会理論が直面している課題は、「主体主義に陥ることなく、主体の回復を促進すること」であるという¹³。既にみてきた「構造の二元性」という考え方が、彼の「主体の回復」の仕方を表わしている。すなわち、「構造的諸属性」（それ故「構造」）は実践を媒介するものであると同時に、その産物であるという考え方である。しかしながら、ここでわれわれが明確に把握しておかなければならないことがある。それは実践として行為を措定している背景には、行為者は自らの行為を反省することによって行為をより「合理化¹⁴」する能力（主体性）をもっている、という考え方が彼にあってはあらかじめ前提されていることである。このギデンズの前提を把握して初めて、われわれは彼が何故「主体者の行為(agency)」とか「行為主体(agent)」という概念を用いたかを理解できるのである。このようにギデンズが「反省性(reflexivity)」を行為を變形する能力であると捉えたことは、ハバーマスの見解にもとづいている¹⁵。

1 図

相互作用：コミュニケーション	権	力	サ	ン	ク	シ	ョ	ン
(モダリティ)：解釈	図	式	弁	舌	の	才	(facility)	規
構造：意味	作用	支						配
								正
								当
								化

2 図



行為者は以前には知らなかった行為の因果的背景を反省を通して捕捉することによって、「反省が実際当然のことのように、人間の主体の側に行為の「自律化」を増大させるのである。そしてこのことは、こうした捕捉が行為の「合理化」を再構築する過程の中に組み込まれる限りにおいてそういえるのである⁽¹⁶⁾。そして、「行為の反省的モニターリング (reflexive monitoring of conduct)」によって「合理化」された行為こそ、ギデンズが「実践」と称したものに他ならない。なぜなら、「実践は行為の反省的モニターリングによって、また、それにもとづいて組織化されている」からである⁽¹⁸⁾。

ところで、ギデンズが「構造」を「社会的実践」の産物であると捉えたことは、既に前述したところである。われわれがここでぜひとも言及しておかなければならないことは、ギデンズがこうした「構造」を意味づけている「意味作用 (signification)」を構成する差異でさえ、「社会的実践」を通して作られていると考えていることである。

「意味作用を構成する差異は、社会的実践の『間[↑]化[↓] (spacing)⁽¹⁹⁾』にもとづいている。⁽²⁰⁾」

こうした考え方は、意味をコミュニケーションの主観的なレヴェルに還元することなく言語を使用する状況のなかで捉える考え方にもとづい

ている。⁽²¹⁾つまり、「記号」は慣習的な用いられ方において理解されなければならないのである。⁽²²⁾しかしながら、ギデンズにあっては「社会的実践」の「間 \parallel 化」それ自身が、何にもとづいているかは終始問われないままである。われわれは、「間 \parallel 化」は「社会的実践」を通して作られるものであると同時に、先験的なものであると考えている。

三

前節のようにギデンズの基本的な立場を把握した上で、われわれは次に彼の「主体の脱中心化」概念の理解の仕方を取り上げてみよう。

ギデンズは構造主義を七点にわたって評価している。そのうちの一つが「主体の脱中心化」である。そこでまず、ギデンズが構造主義を評価する七点について列挙しておこう。⁽²³⁾

- (1) 言語および社会を、差異づける「間 \parallel 化」を通して捉えたこと
- (2) 共時性を分析の対象の中心に据えたこと
- (3) 歴史の解釈がすぐれた洞察を含んでいたこと（時間的距離が民族誌的距離と重要な点において、同じものであることを示したこと）
- (4) 社会的全体性について、機能主義よりも十分な理解を与えたこと
- (5) 主体と客体の二元論を乗り越えようとしたこと
- (6) ヒューマニズム批判および主体の脱中心化の重視によって、意識を意識それ自体にとって所与のもの、透明なものとして捉えた哲学的観点から脱却する道を含意したこと

(7) 文化的な対象が作られる側面の分析についてたゆみなき貢献をしてきたこと

ギデンズが構造主義を評価するのは以上の七点である。以上からもわかるように、ギデンズは「主体の脱中心化」概念を、「意識を意識それ自体にとって所与のもの、透明なもの」と捉えない観点を含意したものと解釈している。さらに、彼は、「主体の脱中心化」が「人間の行為において反省的な構成要素を消失させたり、それをより深層の構造のある種の随伴現象といったものとして取り扱うこと」を意味しているのではないと考えている。⁽²⁴⁾

このように「主体の脱中心化」概念を理解することは、「反省性」を「構造化理論」の核に措定しているギデンズの立場からすれば恐らく当然のことであろう。こうした理解の仕方は、ギデンズが構造主義を否定する側面として指摘する以下の点のなかにも示されている。ギデンズが構造主義を否定する主要な点は、社会に重点を置きすぎて個人の主体的側面を見失っていること（「実践的意識」を捉える「様式」をもっていないこと）、⁽²⁵⁾「主体について判断中止（epoche）をして⁽²⁶⁾いる」こと、「主体が構造の変換のセットとしてのみ分析のなかで回復される」ことである。⁽²⁷⁾

ところで、こうした点が構造主義の否定面として指摘されること自体、ギデンズが構造主義を十分理解していないことを物語っている。というのは、こうした理解の当然の帰結として、ギデンズはレヴィ・ストロースが何故、「主体について判断中止をして⁽²⁶⁾いる」のかを理解していないからである。

レヴィ・ストロースは実践が社会を形成していることを知らなかったわけではない。しかしながら、社会の一切の物が実践を通して作られていると考えていたわけではない。レヴィ・ストロースは、ラングを構成する差異が実践に先立って存在すること、「神話的思考」が反省に先立って存在することを仮定している。それでは、レヴィ・ストロースは何故、こうした仮定をしているのだろうか。それは彼が知（connaissance）と実践との間に非連続が横たわっていると考えているからである。レヴィ・ストロースによれば、思考することは、思考がある種の形成を通じて外的世界を分節化するこ

とである。しかも、この形式は人間の実践に先立って存在していると考えられている。なぜなら、実践を通してこの形式が作られたのだとすれば、そもそも最初の実践はどのような形式をもった思考によってなされていたのであろうか。世界について以外の思考はない。とすれば、思考の形式は実践に先立って存在する世界の構造をおびたものであろう。レヴィ・ストロースはこのように考えたのである。

「それだけではなく私は、生成のうちにあっていつ人間がものを考え始めたのかということ、理論的に把握できるかどうかは疑問だと思います。むしろ私としては、思考というものは人間以前からあったと考えるような気持ですね。」⁽²⁸⁾

実践に先立つ思考の原初的な形式を探究しているからこそ、レヴィ・ストロースは「主体について判断中止をしている」のである。われわれは、レヴィ・ストロースが「野生の思考」をメルロー・ポンティのいう「生な意味(sens brut)」の論理であると考えている点に注目したい。⁽²⁹⁾

「主体の脱中心化」概念は、レヴィ・ストロースが実践や反省的意識に先立つ「生な意味」を探究しているところの視座から理解されなければならない。こうしてみると、構造主義の「主体の脱中心化」概念は、実践や反省的意識を中軸としては捉えきれないことを意味していることがわかる。つまり、この「主体の脱中心化」概念の含意は、ギデンズが理解しているのと異なって「構造」を実践や反省的意識に先立って独自に存在するレヴェルにおいて捉える視座を含んだものである。この点を十分に把握していないギデンズの「主体の脱中心化」概念の理解は、自らの立場にそってなされた一面的な解釈であるといわざるを得ない。

四

構造主義がわれわれに知的衝撃を与えたのは、ヨーロッパの「家畜化された思考」に対して「未開人」の「野生の思考」を対置させることによって、ヨーロッパの文化やヨーロッパ的思考それ自体を相対化させたことであつたことは周知のことであろう。その意味において、構造主義はヨーロッパの近代以降の哲学に典型的にみられるところの理性的意識による近代的自我の中心化の拒否であつたといえよう。その点、ギデンズの「構造化理論」には社会的反省的意識による中心化がみられる。たとえば、ギデンズが「反省性」を人間の行為を變形する能力であると捉えたことは、反省を具体的に媒介する物から遊離させてそれを独立に捉えてしまつてゐる。この点は、反省的意識による中心化の侵犯にもとづいてゐると思われる。

われわれの見解とは反対に、ギデンズは構造主義が反省的意識を分析の対象に組み込んでいない欠点を指摘する。

「より深層の認知的形式の『表層の顕現』にすぎないものとしていかなる種類の反省的理解をも断固として括弧に入れてしまつたために、レヴィ・ストロースの構造人類学はサルトルや他の批評家が強調したように、それ自体社会的、文化的諸状況の特別な組み合わせの産物として、自らの起源を反映する様式をもつていない。⁽³⁰⁾」

しかし、ギデンズがいうように、レヴィ・ストロースの構造分析はたしていかなる種類の反省的意識をも対象に組み込んでいないのだろうか。われわれはこの問いに対して「否」と答えたい。たとえば、レヴィ・ストロースは神話を通して「神話的思考」を探究しているが、神話それ自体は「未開人」のある種の反省的意識を通して形成されたものである。すなわち、ある部族の神話はその部族の成員たちが隣接する部族の神話をいわば「記号の痕跡の束」として無意識に捉え、それ

を「イメージ」を通して反省することによって作られているのである。レヴィ・ストロースは、このように神話を形成する反省的意識を「記号の痕跡」として考えている。このことは別言すれば、ある種の反省的意識である「イメージ」が神話を新しく形成するのは、それが「神話的思考」（実践や意識に先立って存在する思考の形式）を原初的に身におびており、他の神話の諸要素を「記号」として受け取るということである。それ故、彼にとって「神話的思考」は、反省的意識の働きを通して見出しされるものであると同時に、そうした反省的意識の働きをダイナミックな全体として支えるものである。

この「神話的思考」の後者の側面の視座の欠如が、ギデンズの「構造化理論」における反省的意識による中心化の侵犯となつて現われているのである。そして、このことはギデンズの「主体の脱中心化」概念の理解のなかにとりわけ端的に示されているのである。「主体の脱中心化」概念は、実践や意識に先立って存在する「構造」を捉える視座を含蓄したものと理解されなければならないであろう。ギデンズは「主体の脱中心化」概念をこの点において捉えていないのみならず、こうした実践や意識に先立って存在する「構造」を捉える視座そのものを認めていない。

今日の言語論のひとつが教えていることは、「生のままの存在へとさかのぼった言語」を前にして、人間は消滅する」ということである。⁽³¹⁾「構造」を実践や意識に先立ったレヴェルにおいて捉えることは、一見すると、人間の主体性を否定しているかのように思われるかもしれない。しかしながら、この視座は人間の主体性の側面をより明確に把握しようとする迂回的方法なのである。

注

(1) 『思想』—文化の記号論、一九七七、十月・同一記号論の現在、一九七九、四月・Yu・ロトマン『文学と文化記号論』磯谷

- 孝編訳、岩波現代選書、一九七九、一月：『現代思想』—現代の記号論：青土社、一九七九、二月：北岡誠司「文化の構造、知の構造—『文化の記号論』に即した場合」、『思想』—知の一般理論、所収、一九八〇、一月などを想起されたい。
- (2) 本稿では、キデンスに倣って、構造主義を主としてレイヴィストロースの構造主義に限定して対象としている。
- (3) J・ピアジェや上野千鶴子、小川侃氏などは、「構造」を発生的、構成的なものと考えている。しかしながら、われわれは「構造」が発生的、構成的なものであると同時に、前構成的なものとしても取り扱う必要があると考えている。すなわち、「構造」はわれわれにとっては、モデルであることも実在である「存在 (être)」だといえよう。
- (4) Giddens, A., *Central Problems in Social Theory: Berkeley and Los Angeles*, University of California Press, 1979, p. 69. (以下 CPST と略記)。
- (5) CPST p. 64.
- (6) (7) Giddens, A., *Studies in Social and Political Theory*: London, Hutchinson & Co (Publishers) Ltd, 1977, p. 134. (以下 SSPT と略記)。
- (8) CPST pp. 65—66.
- (9) SSPT p. 132, *New Rules of Sociological Method*: New York, Basic Books, 1976, p. 122. なお、これらの二著作では「道徳性」となるべき箇所が「CPST (p. 82) では「サンクション」と変わっている。
- (10) (11) SSPT p. 133.
- (12) CPST p. 81.
- (13) CPST p. 44.
- (14) キデンスは、「行為が束縛から解放されて行為がそれ自体が自律的になることを行為の「合理化」と称している。
- (15) (19) SSPT p. 157.
- (17) CPST p. 56.
- (18) CPST p. 85.
- (19) キデンスは「ドゥリダの「間」化 (l'espacement) という) 概念をその「spacing」として借用している。ドゥリダのいう「間」化は「エクリチュール (écriture) 」の「差延作用 (différance) 」と同様で「空間および時間における分節化」もしくは差異化のことである。キデンスの「spacing」もそれと同義である (Derrida, J., *De la grammatologie*: Paris,

Les Éditions de Minuit, 1967, p. 103. 足立和浩訳『根源のかたに「グラマトロジーについて」(上) 現代思潮社、一三九頁他)。

ギデンズはこの「社会的間Ⅱ化」こそ、「ラングと言語行為を結合」させるものだと考えている(CPST p. 36)。しかしながら、ギデンズは「社会的間Ⅱ化」(社会的実践の「間Ⅱ化」)それ自体を、一体何にもとづいて作られていると考えているのだろうか。この点を踏まえているのがレヴィ・ストロースの構造主義ではないだろうか。

- (20) (21) (22) CPST p. 98 「意味作用」を「社会的実践」において捉えることそれ自体は妥当なものである。しかしながら、テクストを「エクリチュール」の「戯れ (jeu)」として扱う考え方(デリダ)が今日重要視されていることを考えると、ギデンズはこの点を踏まえて「社会的実践」の「間Ⅱ化」という考え方を提起しているわけであるが、「記号」それ自体を人間の手からすでに離れてしまつて、独立に存在するものとして扱った方が適切であろう。

(23) CPST pp. 45—48.

(24) CPST p. 47.

(25) CPST p. 24.

(26) CPST p. 20.

(27) CPST p. 29.

(28) Lévi-Strauss, C., *Reponses a quelques questions: Esprit*, 1963, p. 646. (伊東守男、谷亀利一訳『構造主義とは何か』サイマル出版会、四〇頁)

(29) Lévi-Strauss, C., *De quelques rencontres: L'arc*, 46, 1971, p. 45 (橋嘉彦訳「いくたびかの出会い」、『現象学研究』モリス・メルロー・ポンティ特別号所収、せりか書房、一三一—一四頁)。メルロー・ポンティのいう「生な意味」とは、たとえば言葉を例にとるなら、言葉になる以前の沈黙の言葉のことであり、別言すれば、発生状態にある言葉のことである。すなわち「生な意味」とは「存在の根そのもの」、「始源的存在」のことである。なお、拙論「C・レヴィ・ストロースの構造分析における『野生の思考』の位相について—M・メルロー・ポンティの『野生の存在』の理解を通して」未刊、一九八〇を参照されたい。

(30) CPST p. 27.

(31) 宇波彰「現代言語論のひとつの方向」、岩波講座『文学』3言語、所収、一〇八頁。